

若年女子産婦人科受診者の実態調査

山岸 律子, 宍戸 祥子, 村口 喜代

はじめに

若年女子が産婦人科を受診することは、最近では、一般的なこととなってきている。現在の診療体制下では、精神的にも、社会的にも未成熟な若年女子の対応は、特に配慮が必要とされる。当科では、昭和57年9月以降、思春期特殊外来を開設し、週1回の診療体制を組んできた。この特殊外来にこだわらず当科を受診した、すべての若年女子患者について、過去10年間の動向と、今後の対応を再検討するうえで、臨床的検討を試みたので報告する。

対象および方法

昭和56年1月から平成2年12月までに当科を受診した、2歳から18歳までの902名を対象に病歴から得られた情報を分析、検討した。

結 果

1. 年度別受診者数 (図1)

受診者は年々増加している。産婦人科外来の新患者総数のうち、若年女子受診者の占める割合は、昭和61年では3.3%にすぎなかったが、平成2年では5%に上昇している。各年度別思春期外来の取扱い患者数は、昭和62年度101名、平成2年では117名に達し、全若年受診者数のうち60.6%を占めた。

2. 年齢別受診者数 (図2)

2歳から11歳までの受診者は年齢による差はあまり認められず、平均11.7%であった。12歳のいわゆる初経開始年齢に一致し増加傾向を示し、17歳では179名(19.8%)、18歳は最も多く279名(30.9%)となった。17歳と18歳ではほぼ半数を占めていた。

3. 疾患別受診者数 (図3)

月経異常が最も多く、412名(45.6%)ついで、外陰膣炎が118名(20.8%)、妊娠98名(10.8%)であった。その他96名の内訳は、腹痛、月経変更、外陰奇形、膣閉鎖、自律神経失調症などである。診察の結果、何ら異常所見を認めなかった者は46名(5%)であった。

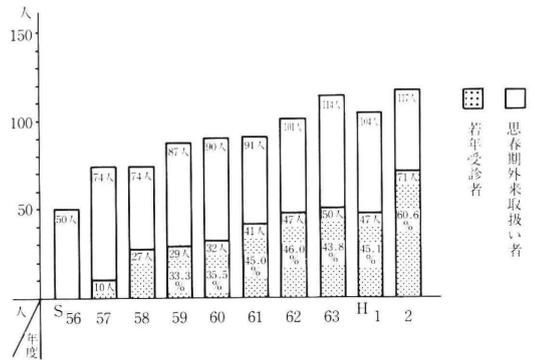


図1. 年度別受診者数 S56~H2

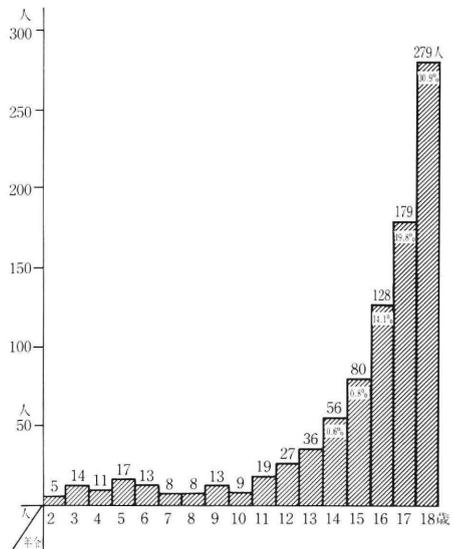


図2. 年齢別受診者数

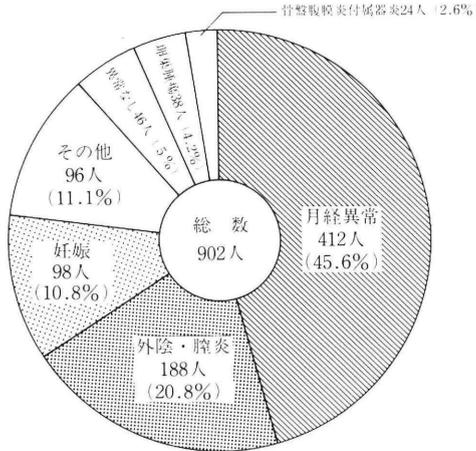


図3. 疾患別内訳

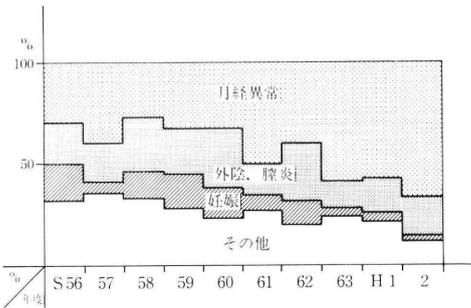


図4. 疾患別分類の遷移

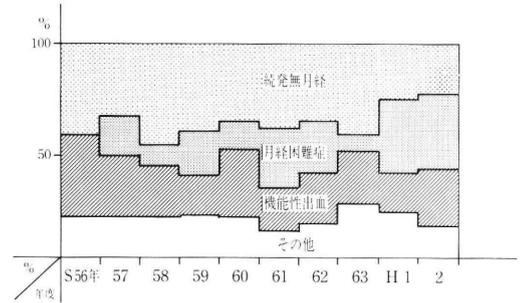


図6. 月経異常分類の遷移

4. 疾患別分類の遷移 (図4)

疾患の中で最も多かった月経異常, 外陰膣炎, 妊娠について, 年度別遷移をみると, 月経異常の取扱い数は, 明らかに年々増加している。その割合は昭和56年では30.3%, 昭和61年50.5%, 平成2年65.8%でした。外陰膣炎は毎年月経異常について多くみられるが, この10年間ではほとんど変動がない。妊娠の取扱い患者は徐々に減少してきている。

5. 月経異常の内訳 (図5)

月経異常の412名のうち, 続発無月経が最も多く129名(31.3%)であった。ついで機能性子宮出血102名(24.7%), 月経困難症100名(24.2%)となった。原発無月経12名, 稀発, 頻発, 過多月経はいずれも10名であった。

6. 月経異常の遷移 (図6)

月経異常について, 年度別遷移をみると, 過去10年間を通して, 続発無月経を機能性子宮出血の受診者は, ほぼ横ばい傾向を示しているが, 月経困難症についてみると, その割合は平成1年では35.5%, 平成2年36.6%と増加している。

7. 外陰膣炎の年齢分布 (図7)

低年齢でも結構多く, 各年齢にわたり認められる。しかし16歳から18歳までが多く, 全体のほぼ半数を占めており, このことは, 明らかに性行動の活発と関連あるものと推察される。

8. 入院症例の内訳 (図8)

妊娠, 分娩例27名(40.2%)と最も多く, 卵巣腫瘍18名(26.8%), 骨盤腹膜炎10名, 外陰外傷6名, 強度の貧血を伴った若年出血2名であった。

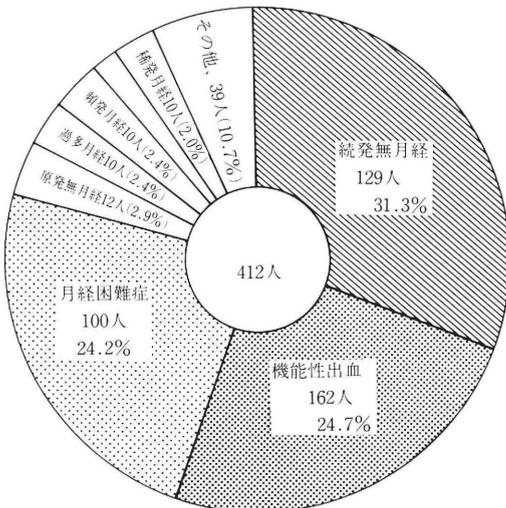


図5. 月経異常の内訳

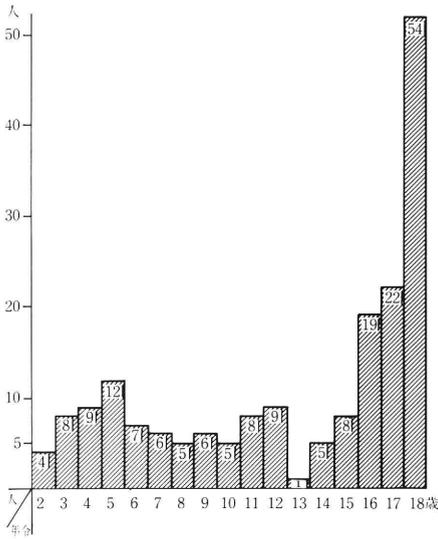


図7. 外陰，陰炎症例の年齢分布

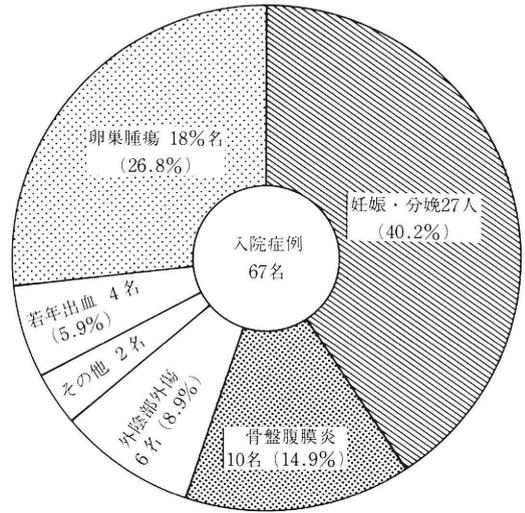


図8. 入院症例の内訳

9. 妊娠症例の検討 (図9)

妊娠症例 98 名のうち，17 歳と 18 歳が圧倒的に多く，ほぼ 9 割を占めていた。初診時の妊娠週数では，初期の者が全体のほぼ 7 割を占め，中期の者と後期の者が 15 名ずつとなった。妊娠経過では，1 回のみの受診で以降来院せず，不明の者が約 4 割を示した。人工妊娠中絶のため，他院に紹介した者が 25 名，当院で分娩した者 18 名，他院で分娩した者 3 名，自然流産 5 名，子宮外妊娠 3 名，胞状奇胎 1 名であった。

10. 分娩症例 (図 10)

年齢は 15 歳から 18 歳までで，相手の年齢は 15 歳から 45 歳まで幅広く分布し，初診時結婚していた者は 2 名で，他 12 名は，妊娠分娩後に入籍している。家庭の背景は，家庭内の不和，両親の離婚，別居など家庭環境の不安定さが指摘される。初診時の妊娠週数では，後期の者が多く 10 名を示した。妊娠，分娩経過は早産となった者 1 名，切迫早産，前期破水，妊娠中毒症などで早期から入院管理となった者が 4 名で，産科学的にも問題がある。

考 察

近年，性成熟の早発化，性行動の活発化と相まっ

図9. 妊娠症例の検討

1. 年齢

15 歳	4 人 (4.0%)
16	5 (5.1)
17	29 (29.5)
18	60 (61.2)
98 人	

2. 初診時妊娠週数

Ss	~7w	~11	~15	~19	~23	~27	~31	~35	~39
42 人	26	9	4	2	8	3	2	2	
69.3%		15.3			15.3				

3. 妊娠の経過

入院	分娩	18 人	} 27 人 (27.5%)
	自然流産	5	
	子宮外妊娠	3	
	胞状奇胎	1	
当院で人工中絶		4	
他院で分娩		3	
KAとして他医紹介		25	(25.5%)
不明		39	(39.7%)

図10. 分娩症例

症例	年齢	相手の年齢	婚姻関係	家族的背景	初診時妊娠月数	妊娠分娩経過	
1	18	⑬	産後に結婚	両親離婚	7ヵ月	初診より10日後分娩	1,900 g
2	17	25	妊娠中に結婚		4ヵ月	39週自然分娩	3,380 g
3	17	20	相手蒸発	両親別居	2ヵ月	40週自然分娩	3,040 g
4	18	⑬	妊娠中に結婚		7ヵ月	40週吸引分娩	2,770 g
5	17	21	妊娠中に結婚		4ヵ月	34週切迫早産で入院 40週自然分娩	2,980 g
6	18	⑬	妊娠中に結婚	両親離婚	3ヵ月	30週切迫早産で入院 40週自然分娩	2,960 g
7	18	25	妊娠中に結婚		3ヵ月	29週 PROM 入院 38週自然分娩	3,424 g
8	18	21	妊娠中に結婚		7ヵ月	39週自然分娩	3,070 g
9	18	30	結婚		8ヵ月	41週自然分娩	3,280 g
10	18	22	結婚	夫失業中	5ヵ月	妊娠中毒症 39週自然分娩	2,540 g
11	17	35	妊娠中に結婚		27週	37週自然分娩	2,846 g
12	18	⑲	妊娠中に結婚		38週	42週吸引分娩	2,910 g
13	18	⑬	妊娠中に結婚	夫無職	28週	39週吸引分娩	3,096 g
14	17	⑰	妊娠中に結婚	両親離婚	13週	38週吸引分娩	2,752 g
15	18	45	妊娠中に結婚	夫再婚	9週	40週自然分娩	2,384 g
16	16	⑬	分娩当日に入籍	母親死亡	32週	38週吸引分娩	2,936 g
17	15	⑮	未婚	両親離婚	40週	39週自然分娩	2,596 g
18	18	25	未婚	両親離婚	34週	40週吸引分娩	2,494 g

て、若年女子が産婦人科を受診することは一般的なこととなってきている。今回の結果をみても明らかに総外来患者数に占める割合は年々増加している。昭和57年より開設した思春期特殊外来への受診者も増えており、若年女子受診者の約6割を扱うまでになってきた。疾患では、月経異常の受診者が増えており、なかでも続発無月経と月経困難症の患者が多く、長期的治療、管理が必要とされる症例で占められている。

今回の結果を踏えて、今後の思春期特殊外来の

整備、充実を改めて検討していきたい。

文 献

- 1) 村口喜代, 宍戸祥子: 思春期外来患者の臨床的検討. 仙台市立病院医誌 7, 51-59, 1982.
- 2) 高橋健太郎, 吉野和男, 渋川敏産, 北尾 学: 島根医大産婦人科外来を訪れた思春期小児婦人の現状について. 思春期学 2, 70-74, 1982.
- 3) 武田 敏, 川野雅資: 看護と性, 思春期の性行動, P 144-145.
- 4) 加藤宏一: 小児思春期婦人科学 73.